



在特会の提起したもの…言論とは何か、差別とは何か

『ネットと愛国』 著者・安田浩一さん インタビュー

(聞き手 三浦 小太郎)

これまでは外国人労働者の問題などについてすぐれた作品を残してきたジャーナリスト、安田浩一氏が執筆した今年四月に発行された『ネットと愛国』は、いわゆる「ネット右翼」「行動する保守」運動についての優れたルポルタージュとして、講談社ノンフィクション大賞、JCJ賞(日本ジャーナリスト会議賞)を受賞した。後者では、次のように本書は紹介されている。



『ネットと愛国』の表紙
安田浩一著・講談社

「聞くに堪えない差別的な言葉を叫び、街頭活動を行う『在特会』(在日特権を許さない市

民の会)とは? その実態と闇を暴く。なぜネット右翼が街に出て、民族差別を煽る怨嗟と憎悪の行動に走るのか。『うまくいかない人たち』による『守られている側への攻撃』という、病巣、ネットが媒介する人間関係の脆弱性・無思想性が抉りだされる。今日日本が抱える新しいタブー集団に切り込み、若者の「潜在意識」を浮き彫りにした鮮烈なルポ」。

概ね正しい評価だろう。しかし、私(三浦)には、この在特会の主張や存在を全否定することはできなかった。私個人の中に、確実に彼らに近い感情は存在する。そして、私がさらに違和感を感じたのは、在特会の朝鮮学校襲撃事件に対する、いわゆる「差別に抗議する」側の姿勢だった。二〇〇九年十二月四日、在特会をはじめとす

る一団が朝鮮学校を襲撃、「スパイの子供」をはじめとする様々な言動で攻撃した事件が起きた。彼らが戦果として挙げたその動画は、私にとつてとても正視に耐えないものだ。しかし、彼らの差別言動を批判する「識者」「人権論者」の方々は、それならば朝鮮総連が、小川晴久、萩原遼、李英和氏が守る会やRENKを結成した時、はるかに多くの朝鮮総連メンバーが暴力的に攻撃した時に、果たして積極的に朝鮮総連の暴挙を批判しただろうか。

さらに言えば、差別的言動により傷ついた在日コリアンの心情を思え、と語る人々が「傷ついた」ところか、今この時も政治犯収容所で拷問を受け、強制労働の中心でゆく北朝鮮民衆の悲劇について、そして、その悪しき政権を少なくとも表面的には支持している朝鮮学校の教育について、なぜもっと積極的に発言しないのか。

安田浩一氏は、これまでの在日外国人労働者への取材が、彼らへの深い愛情と日本における共生の意志に根差しているだけではなく、彼らの側のような矛盾や問題点をも直視してきた。本書でも安田氏は、在特会的言動を批判しても、決して断罪はしていない。そして、朝鮮総連の人々が、本書ほど率直な形で心情を吐露しているの

を私は初めて読んだ。私たちの運動について、朝鮮学校のあるべき姿について、安田氏とならば深い議論ができると信じ、インタビューを申し込ませていただいた。まず、議論の前提として朝鮮学校の教科書をお送りし、その内容についてお読みいただいたのにインタビューは始まった。

記号にすぎない「在日コリアン」

三浦 私たち守る会は、朝鮮学校で現在使用されている教科書を翻訳したのですが、在特会の抗議方法の是非はともかく、あの教科書内容についてはどう思われましたか。

安田 未だにこの様な文言(金日成・正日崇拜など)を教科書で用いていることに、率直に言って驚かされました。私は民族教育は必要だと思っています。しかし、この教科書内容が正しい民族教育であるか否かには大変疑問ですね。

三浦 在特会の方々は、私たちの翻訳した教科書を読んだうえで、抗議行動を行っているのでしょうか。

安田 おそらくきちんと読んではいないでしょう。私は、あのような資料を冷静に読み込んだうえで、精査し、

そして朝鮮学校のありかたを批判するというやり方を彼らがとっていれば、特に問題にすることはなかったと思います。

私が在特会で問題だと思ったのは、朝鮮学校の教育内容や歴史を客観的に学ぶ過程を殆ど終えずして、まず学校そのものを憎悪の対象として選んだということ、そこが一番の問題だと思います。差別がいけないというだけではなくて、こういう批判は、在日社会にとつて、脅威や恐怖ではあるかもしれないけれど、決して有効なものではない。

三浦 ただ、これまでの戦後史の中で、在日コリアンの存在が、歴史の被害者、差別の被害者という形でしか語られなかった一面もあると思います。その意味では、在特会の言い分にも一理あるのではないでしょうか。

安田 勿論、個々の言説のなかではきちんと検証すべきものはあるのですけれど、今彼らが言っているのは陰謀論でしょう。在日がメディアを支配しているとか、日本の資本や政治も影響下に置いているとか、それはほとんど、ユダヤが世界を支配しているといったたぐいの陰謀論にすぎない。

在特会の人たちを見てみると、彼らには、希望や機

タの上では正しいものもあるでしょう。しかし、そこから何かを深く検証したかというのは全く見ることもできないし、彼らの怒りが、本当に在日コリアンに向けられているのかというのも、私は少し疑問なところもあります。つまり、憎む理由というものが、果たして存在するのだろうか。ある種、彼らは、被差別部落であるとか、一部の左翼であるとか、わかりやすい記号を求めている。敵として認知しやすい所を求めているだけかもしれない。

はつきり言いますと、彼らから、在日コリアンや同和地区への、本当の心の底からの怒りとか憎悪とかいうのを、私はあまり感じたことはないです。それは、彼らの言葉がいかに激烈で差別的なものだろうと、それは彼らの実体験に根差したものではありませんから。

三浦 これは私もそうですね。本当に総連の人を憎んでいるかといったら、実体験では別にたいして恨みもないからね。まあ、日本人拉致事件に協力したことへの怒りはありますが。その意味では、知人、友人、家族が総連に騙されて北朝鮮に渡った世代の人たちの怒りとはだいぶ違いますね。

安田 たとえば北朝鮮問題で言ったら、彼らが拉致問題

会を奪われてしまった被害者である自分を何とか肯定しようという強い意志があつて、今の自分たちの置かれている状況の責任すべてを、在日コリアンに押し付けているように思えます。いわば、下から見上げるような新しい差別主義とでもいえるのではないでしょうか。

三浦 私はたとえば朝鮮総連以上に、朝鮮総連や北朝鮮を支持している、彼らを弁護する日本知識人に対してのほうに強い憤りを覚えるんですけど、彼らにはそういう発想はないのでしょうか。

安田 彼らにとつて、在日というのは一つの記号なんです。最もわかりやすい敵としての記号。今三浦さんが言ったような存在は、やはり記号として成立しにくい。繰り返しますが、在特会の在日コリアンへの批判は、リアルな在日、リアルな北朝鮮を知った上でのものとは到底思えない。

たとえば守る会の方々のような、北朝鮮の人権問題への関心などを、在特会から感じたことは一度もないですね。確かに、彼らは朝鮮問題について、数字はよく集めていますよ。彼らの引用する在日コリアンの問題点についての数字や歴史的事実の検証がすべて間違っているかといったら、そんなことはなくて、デー

に関心を持つことは別に悪いことではないけれど、救う会のデモに行ったとき、拉致被害者を救えと言う主張よりも、ヘイトスピーチ（注・憎しみの主張）が中心になってしまふ。被害者救出ではなく、デモに参加して自分たちの主張することが目的になる。そうなれば主催者とは対立しますし、横田さんたち家族会も困りますよね。

三浦 ただ、在特会を弁護する気は毛頭ないけど、これは安易に彼らを受け入れてしまった運動の側にも問題がありますね。差別的なスローガンは言うなとか、最初に規制が必要だったわけだし。

安田 多分、在特会について主催者の側に充分な知識がなかったんだと思いますよ。あまりネットとかやらない世代の人たちには彼らの存在自体がよく分からないだろうし、正直、日章旗を持ち、北朝鮮に批判的なスローガンを持っていればそれだけで仲間だと思ってしまうのではないかな。

朝鮮総連内部の声

三浦 「ネットと愛国」を読むと、朝鮮総連の側が実に誠実に、本音で安田さんと対話しようとしていますね。

たとえば次のようなくだり。

「僕ら朝鮮人だって、一〇〇%の正義があるわけじゃない。事件（先述した京都朝鮮学校襲撃…三浦注）のことだって、よく考えてみれば、グラウンドを持たない学校というのも、確かにおかしい。もともと早く、僕らが何とかしてあげるべきだったとも思うんです。ただね、僕らは朝鮮人であることを自覚しながら、それでもずっとこの国で生きていきたいんですよ」。

「今は、在特会の人とかね、会って冷静に話してみたいという気持ちがあります」（中略）：別に皮肉でも開き直りでもなく、ほんま、在特会のおかげで、僕らこれからどうやって生きていくべきか、真剣に考えるようになりましたもん。その上で、日本っていう国はワシにとっても、あんたらにとっても、同じ故郷やないか、一緒に仲良くできんのかと、きちんと話し合ってみたいんです」（二二五ページ）

正直、こういう会話が、私と総連の間で、また、守る会と総連の間でなぜできないのか、真剣に考え込んでしまっていました。

安田 たえば、総連とは言わないまでも、便宜的に左と右という言い方をするとしたら、これは左の側、差

いマイナーな話題だからということでしょうか。

安田 多分、三浦さんたちの運動を好意的に報じてしまうと、レイシズム、朝鮮学校いじめに加担しているとみられてしまうという、メディアの誤った危機意識があるのではないのでしょうか。

しかし、これは無償化反対、賛成、どちらに加担するという問題の立て方ではなく、メディアとしてはきちんと双方の議論を紹介しながら、教科書の是非だけではなく、朝鮮学校のありかた、民族学校のありかたまで含めた議論をしていかなければならないでしょう。あえて言えば、民族学校は必要なのか必要でないのか、その原則から議論してもいいと思います。メディアがそういう議論を避けているのは確におかしい。

三浦 私は在特会的な行動は、かえって総連内部の結束を深め、日本への敵対意識を強めてしまうと思っていますが、先ほどの安田さんの紹介する在日コリアンの発言を聴くと、むしろ逆の人もいますよね。日本人との対話の必要性を感じたような。

安田 そうです。朝鮮総連や学校関係者を取材して実感したのは、やはり苦悩し、試行錯誤している人は少ない。今や、盲信的に北朝鮮を信じている人はまず

別に反対する広い意味でのリベラルの側にも問題があると思います。左の一部に根強い硬直性、右と左という区分けの中でしか物事を考えられないという人も確かにいるわけで、これまでの歴史だと、公正に見て左の側の方が、議論を拒否する姿勢が強かったという気がしますね。

逆に言うと、これは在特会が民団と総連をいつしよくたに敵とみなし、対話すら拒否する姿勢と似ているところもあるんですよ。右翼はすべてレイシストであり、差別主義者であり、在日コリアンを弾圧する側であるという思いが、左の側にあることも事実でしょうね。

三浦 私個人はあえて分ければ、右派、保守的な人間かもしれないけど、守る会はむしろ左派やリベラルな人が大部分です。在日コリアンも参加している。そして、これまで訴えてきた朝鮮学校無償化反対や補助金停止の運動も、差別主義に陥らぬよう細心の注意は払ってきたつもりなんです。総連自身はおろか、ジャーナリズムでもほとんど産経新聞以外は関心を持ってくれないようです。

これはなぜなのでしょう。あまり興味をもたれな

いません。北朝鮮の実態も分かった上で、それでも戦後自分たちが、様々な歴史過程の中で守ってきた民族教育の火だけは消したくないという思いを持っています。

そして、近年の事件や日本での様々な総連批判の言説を経て、在日としての自分たちの立ち位置を考え直している人、単純に在特会を批判するだけではなく、自分たちがなぜこのように見られてしまっているのかを深く考え直している人もいます。これが私には興味深かった。彼らの思考や苦悩が朝鮮総連という組織を変える、もしくは何らかの公的な発言となるには時間がかかるけれど、この日本社会全体と、もっと深く豊かに向き合うことはできないのかと模索している人たちは少なくないことに、私は希望を感じました。

三浦 その意味では、在特会が極端な形であれ、朝鮮総連に何かを気づかせたというのはあるかもしれませんね。

安田 ただ、私はやはり、侮辱的な言葉を浴びせられた側に共感します。自分はいったい差別的な言動は許せない。問題を提起したからといって人を差別する権利など誰にもない。問われているのは、やはり日本社会

の側です。

橋下市長と週刊朝日報道

三浦 では、その差別的言動という見地からおうかがいしたいのですが、大阪の橋下市長に対し、週刊朝日が「ハシシタ、奴の本性」という佐野眞一氏の連載記事を十月二十六日号で開始し、橋下氏の抗議を受けて直ちに連載中止に至った事件がありましたね。

私は橋下氏をどう評価するかは別として、少なくとも、本名は「ハシモト」と読むのにそれをわざわざ読み替え、出自を暴く必要も権利もないだろうと思いましたが、内容も差別を誘発しかねないと感じました。そして、それ以前に、こういう見出しとかは以前なら編集部でチェックするだろうと思ったのですが、この事件についてはどうお考えでしょうか。

安田 私もあの見出しを見て、心地よい気持ちなどするわけもなく、橋下という名字も、また、そういう地名もあるわけですから、あのような見出しをつけるのはおかしいと思った。でも、もっと問題なのは、あそこまでの見出しをつけ、橋下氏の出身まで掘り下げた記事を書くのなら、それだけの覚悟がなくちゃいけない。

言えは保身です。それが崩れてきたのは、確かに様々な問題について、タブー視せずに議論できるようになったことでもありますから、いい面もあるだろうとは思いますが。

しかし一方では、一点突破全面展開とでもいいいますか、タブーを破って本質を語ることが目的ではなく、単に自分の否定したい存在を悪く言うためにあらゆる現象を結び付けたがる人もいて、例えば今回の問題を朝日新聞批判と直結させたり、著者の佐野氏への個人攻撃を執拗におこなったりする発言も目につきます。

三浦 私はこれまでの部落解放同盟の運動には問題があったと思いますし、それは批判されるべきですが、それとは別に、差別主義的な言論はどこまで許されるのかという問題があると思います。

事実上ネット社会では匿名の形であらゆる言論が「自由」になったわけで、差別であれ誹謗中傷であれ可能です。今のこの状態は止むをえない事態だと思われれますか、それとも、言論の墮落を招くものと思われれますか。

安田 僕は書き手として、言論の自由は死んでも守らな

いといけないと思っています、そこにタブーがあつて

極論を言うようですが、あそこまで書いたらもう言論での橋下氏との戦争ですからね、週刊朝日編集部としても覚悟も論理武装もしたうえで勝負かけなくちゃいけないはずですが。それなのに、何の準備もなく装備もなく戦争を仕掛け、しかも簡単に白旗を掲げたことに僕は愕然としましたね。あんな簡単に白旗を上げるのなら、なぜ戦争を仕掛けたのか、無謀な戦争以外の何ものでもない。

三浦 これまで差別や出自について記事にするときは、建前かもしれないけど、同和差別に繋がるような言動は控えようとか、民族差別になつてはいけないとか、そういうよく言えば配慮、悪く言えば抗議を恐れる自主規制があつたと思うのですが、結局差別的な表現を避けようというのは、後者の形式的なタブーにすぎなかったのでしょうか。

安田 形式的なタブーにすぎなかったと思います、僕も週刊誌というメディアにいましたけれど、差別、被差別の問題を真剣に議論したことはほとんどない、原稿をチェックするとき、この表現をしたら危ないんじゃないかという、その線引きだけは敏感になる、それは人権意識とは全く別の文脈でとらえるべきで、あえてはいけない、その上で、言論の自由というのは、言論であるからこそ自由であると思います。今ネットに恣意的にあふれているのは、これは言論ではない。それは淘汰されていくべきもので、その力が、言論に求められている。言論の自由を守るために、言論に値しないものをいかに駆逐していくか、それがいま僕らに求められていると思いますね。

排除とか言葉狩りではない、言論とは何か、それを考えることを最もおろそかにしてきたのが、言論人という存在なのかもしれない。それが現在の差別発言の氾濫を招いた。自省の意味も込めて私はそう思っています。

ちよつと話はずれるかもしれませんが、在特会がいま京都地裁で損害賠償の問題で争っているわけですね。在特会側の論理は「言論の自由を守れ」なんです。彼らの論理は、朝鮮人をどんなに罵倒したとしても、それは言論の自由である、言論の自由を貴方たちは保障しないのかという論理です。言論の自由という本来責任を伴うはずの概念が、今、言論の価値をすべて相対化し、差別言動にすら利用されてしまっていることに僕は危機感を覚えます。

北朝鮮難民と外国人学校法制

三浦 現在、日本には、帰国事業で北朝鮮に渡った帰国者とその家族など、約二〇〇人の脱北帰国者が入国し定住しています。在日外国人労働者問題の観点から、この脱北者問題についてはどうお考えですか。

安田 僕は積極的に受け入れるべきだと思います。これまで日本は、ほとんど難民を受け入れない国でした。特に日本と関係のある北朝鮮帰国者の受け入れをきっかけに、この難民閉鎖国の現状を破るべきでしょう。

三浦 朝鮮総連を批判するとしたらここが一番のポイントかもしれませんね。あなたたちは日本の差別には向きあい批判してきたかもしれないけど、自分たちが送り出した帰国者が難民となっているのに助けようともしないし、彼らが北朝鮮に送り返されて酷い拷問を受けているのに金正日、金正恩に抗議もしないのかと。

安田 拉致事件を含めて人権弾圧全体について、いつか北朝鮮政府も、また総連も、自国の悪に対し向き合わなければならない時が来るでしょうね。そして私は日本人も同様に、自国に対し自省的に向き合うべきだと思いますし、その姿勢を私は絶対に放棄するつもりは

ないです。

三浦 先ほど日本における脱北者について触れましたが、日本語のできない彼らの最初の悩みは日本語学習の場がまだ整備されていない音です。安田さんが取材してこられた、例えば日系ブラジル人の労働者についてですが、彼らも日本語学習も、又民族教育もともに必要としていますね。まず、日本語学習については現在どのようなシステムになっているのでしょうか。

安田 一部の地域では、無償の日本語学校をおこなっていますが、正直、地域差もあるし、ボランティアにゆだねられているものがほとんどです。私は、彼らに日本語を強いるというのではなく、日本で生活し働き、日本人と交流する上で、言葉の問題というのは一番重要だと思っています。

彼らは日本の製作現場で重要な役割をもう担っているのですから、日本国が日本語と、そして、彼らのブラジル人としてのアイデンティティを守りたいという気持ちを尊重すれば、ポルトガル語の教育を受けられるシステムを作ることが必要ではないでしょうか。

三浦 私は個々の状況に地域が場当たり的に対応するのではなく、在日外国人のために、彼らが学べる外国人

学校の法律をきちんと制定して、その中で朝鮮学校も位置付けていくのいいと思います。それは当然ある程度日本の法律に従った教育をすることにはなりますが、その上で民族教育も朝鮮語も、正しい、独裁者礼賛ではない形で受けられるようなシステムになれば理想的かと。

安田 それは一つの考え方ですね、ただ、今の段階では、民族学校そのものが朝鮮人学校の場合否定され、スパイ教育をしているなどという言説が起きてしまっている。これは在特会だけではなく、おそらく多くの人たちがそう思っている、そういう土壌があるからこそ広まっている言説だと思います。その結果、そもそも民族教育自体が否定されかねず、冷静な議論はできない状況もある。

三浦 正直、ここは安田さんとうしても合わない所かもしれませんが、私はあの学校教育の内容の中には、徹底していけば、確かに洗脳教育と言われてもやむをえない面があると思うんです。ただ、それが可能かどうかは別として、朝鮮学校をより良い民族学校として作り直していけば、それはこれからの日本にとって必ず必要なものとなるだろうということを、守る会とし

ては訴えたいのです。そのためには法制度も含めて、こういう方法が必要なのか、そこが重要な問題だと思います。

安田 確かにここは三浦さんと違うところかもしれませんが、ただ、今三浦さんがおっしゃったような議論をきちんとできれば、単に朝鮮学校の問題だけではなく、日本人と在日コリアン、そして在日外国人の問題について劇的な変化が起きてくるはずだと思います。

三浦 今日長時間ありがとうございました。

(二〇一二年十月三十日)

『光射せ!』第11号 原稿募集 2013年6月上旬発行予定

朝鮮高校への授業料無償化を止めた勢いで、次は朝鮮学校への税金投入を止めよう。朝鮮総連の洗脳教育に代わる、よりよい教育を考えよう。在日の子どもたちを大きく羽ばたかせ、社会と世界に貢献する人材を作るために。広く議論を起こそう。話し合いの広場として『光射せ!』は役割を果たします。原稿は400 詰め用紙で30 枚でいい。5 月末締め切り。編集部にお電話ください。